

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360047

研究課題名(和文) 1930～50年代マスメディアと女性—内容分析とライフヒストリー調査の結合

研究課題名(英文) Mass Media and Women from 1930s to 1950s: Content through Content Analysis of Media and Women's Life History Interview

研究代表者

木村 涼子 (Kimura, Ryoko)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：70224699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：戦前の大衆的な婦人雑誌の内容分析の研究成果を生かし、当時の読者層であったと思われる、1930年代か1940年代にかけて高等女学校に通っていた世代の高齢者女性にライフヒストリーのインタビューを行い、メディアの内容と受け手の女性読者の生活や意識を関係づけることを試みた。その結果、家庭における女子への教育方針や高等女学校などの文化、当時の戦時状況などと関わりながら、マスメディアが女性たちにとってそれぞれの意味をもったことがわかってきた。今回注目した、婦人雑誌連載の大衆小説については、明確に小説名や作家名が語られることは少なかったが、日常の楽しみとして親しみ、潜在的な影響を与えていることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Based on the preceding research of women's magazines in prewar Japan, this research aimed to analysis a relationship between content of women's magazine and female readers through life history interview research to the women who went to women's secondary school in 1930s or 1940s. As the result of research, it had become clear that mass media such as women's magazine gave them a variety of meanings in daily life, but it's depends on their parents' value, school culture and the wartime conditions. About impacts of popular serial novels for women in women's magazine that in focused on in this research, it is suggested that those novels had gave pleasure and entertainment to women readers. Although they didn't say concrete titles of novels or names of authors often, they would be influenced by those mass culture potentially. It is very a interesting finding that women readers read many novels but didn't remember 'important things'.

研究分野：教育社会学、歴史社会学

キーワード：ジェンダー マスメディア ライフヒストリー

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、20世紀の社会において、マスメディアや大衆文化はいかなる意味をもち、どのような機能を果たしてきたのかについて、あらためて歴史社会学的な研究が隆盛している。とりわけ、近代初期に大衆化する婦人雑誌に関する欧米におけるメディア研究は、90年代以降盛んに成果を挙げている。日本でも、史料としての婦人雑誌を整理するとともに、それぞれの特徴を考察する女性史研究が着実に積み重ねられているし、個別の研究テーマを追究するために婦人雑誌を分析の素材としてとりあげる研究も増えてきている。しかし、婦人雑誌というメディアそのものを近代化の時間的・空間的文脈に位置づけて社会学的に扱う研究はまだ十分には展開されていない。

(2) 本研究はマスメディアを分析対象とした歴史社会学的な研究の中に位置づけられる。研究代表者は、平成19-20年度・基盤研究(C)一般科学研究費補助金「大衆婦人雑誌にみる近代日本のジェンダー形成 誌面の多面的分析と読者調査」(課題番号19510274)を受けて、その成果を単著『<主婦>の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』(吉川弘文館、2010年出版)にまとめ、学会関連の賞(日本出版学会賞、昭和女子大学女性文化研究賞)を受けるなど高い評価を得た。平成23年度には挑戦的萌芽研究助成「大衆婦人雑誌と女性読者 ジェンダーとメディア研究の新しい手法開発を目指して」(課題番号24651286)を得て、戦前に婦人雑誌を購読していた世代の女性を対象にライフヒストリー調査を行い、メディアの内容分析とメディアの受け手をつなぐ調査手法の開発を目指した。

本研究は、ジェンダー秩序形成に関わるメディアの内容とメディアの受け手の関係性を明らかにするためのインタビュー調査を本格的に実施するもので、これまでの一連の婦人雑誌研究の流れに位置付くものである。

2. 研究の目的

本研究は、昭和モダニズムの1930年代からその後のファシズム期をはさんでの敗戦直後1950年代までの激動の時代に、マスメディアと女性読者層が取り結んだ関係性について明らかにすることを目的としている。今回焦点をあてているのは、以下の2点である。

(1) 第一には、マスメディアの誌面の数量的な内容分析と質的分析を組み合わせた内容分析という、これまでの研究成果を、戦前の読者世代の生活史の中で位置付けようとしている点である。つまり、メディアの内容分析とライフヒストリー研究との統合を目指すことによって、メディア研究で常に課題として浮かび上がる、受け手分析に本格的に取り組もうとしている。高齢女性への半構造化インタビューを通じて着想し、開発してきた手法は、ゆるやかな質問項目に沿ってインタビュイーにライフヒストリーを語ってもらうだけではなく、調査者の側から、当時のマスメディア・大衆文化に関する情報を提供し、記憶を喚起することによって、相互作用的にライフヒストリーを再構成するところに特色がある。ジェンダー研究で重視される、マスメディアが女性の意識や行動に与える影響を、短期的・表層的ではなく、女性の「人生」という枠組みで総合的に分析することを目指す。

(2) 研究のスタート時点では明確に焦点化されていなかったことであるが、通常大衆小説研究の中で軽視されがちな、女性向けの現代小説、いわゆる「通俗小説」を読むことの意味、そしてそれらを書く流行作家の執筆生活の状況、文学観や生活意識を明らかにすることも目指す。インタビューを通じて、婦人雑誌に連載されていた女性向けの現代小説の楽しみは、活字の形で享受されるだけでなく、映画化され流行歌を生み、ファッションや広くレジャーや消費文化などに結びつき、メディアミックスを通して、若い女性の生活において見逃せない影響力をもっていたのではな

いかとの印象をあらためて強くした。その発見から、連載小説をはじめとする大衆文化の果たした役割の探究することを第2の目標とした。

3. 研究の方法

(1) 1930～1950年代という激動の時代に社会的影響力をもったマスメディアと、その受け手であった女性を対象に、メディアの影響に関する記憶を引き出す積極的「介入」をともなった、ライフストーリーの半構造化インタビューをおこなう。調査の対象としては、当時マスメディアを豊富に享受する経済的余裕と読書習慣をもっていた社会階層の女性(中等・高等教育学歴、現在80歳～90歳代)とした。ライフストーリーの聞き取りという調査の性格上、複数回のていねいな面談が必要であるため、インタビュー対象者は3年間の調査期間で当初8～10名程度を予定していたが、平成27年度より研究分担者として土田陽子(和歌山大学)の参画を得たため、最終的には総勢18名に協力を得ることができた。

(2) 女性たちに対する聞き取り調査に際しては、先述のように、調査者との相互作用的な手法を用いた。マスメディアがもっていた社会的影響力を、個人の「女性」としてのライフストーリーという時間の流れの中に位置づけながら、明らかにすることを目指す。通常のインタビュー調査では、「第二の自然」のように生活の中に溶け込む大衆文化の情報は、インタビューからはあまり積極的に語られることはない。これまでに実施したメディアの内容分析の成果をベースに、新たな史料を追加しながら、対象デモクラシー・昭和モダニズムの1920～30年代、戦中ファシズム期、戦後直後の1945～1950年代の3つの時期ごとに、社会全体におけるジェンダー秩序の形成や変容、女性の生き方に関わる重要な分岐点あるいは複数の選択肢を提示するような論争や流行文化について、学術的あるいは「高踏な」メディアよりは、より多くのひとびとに

影響を与えたと思われる大衆的なメディアを中心に整理し、インタビュー・ガイドの副次的資料として活用した。それらを用い、通常のインタビューとは異なり、マスメディアに関する情報を調査者から積極的に提供し、調査協力者と調査者の相互作用の中でライフストーリーを再構成していった。

(3) 研究代表者の前勤務校である大阪女子大学(現在、大阪府立大学に統合。戦前は旧制の女子高等専門学校であった)の同窓会組織(斐文会)をはじめとして、研究分担者が関わりをもつ戦前の高等女学校の同窓会組織複数にも協力を依頼し、現在80歳から90歳の年齢層で聞き取り調査に協力いただける方を、郵送依頼もしくは同窓会関係者による直接紹介によって募った。

郵送調査および依頼によって得られた調査協力者の中から、お一人3～5回、合計時間10時間ほどのデプス・インタビューを実施した。聞き取り調査結果はテープ起こしを行い、聞き取り内容から婦人雑誌を中心とするマスメディア・大衆文化に関わる事柄を抜き出し、婦人雑誌の内容分析と対応させて考察している。

(4) 戦前に人気だった女性向けの「通俗小説」やそれに関わる映画やファッションなどについてのインタビュー・データと関連づけながら、戦前の通俗小説を代表する人気小説の一人であった加藤武雄(戦前の人気ぶりや婦人雑誌や新聞での活躍に比して、現在では驚くほど文学史上忘れ去られている作家の代表として)の作品群、評論やエッセイの収集と分析、や加藤武雄の親族および関係者へのインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 1930年代後半から40年代前半(戦前)の女子教育制度と進学状況の基礎データを整理するとともに、女子学生文化、家族のあり方(特に文化資本、母親や父親の女子教育についての考え方)、女性の労働、性役割、

セクシュアリティなどについての、近代的なジェンダー秩序の形成や変容に関わる論争や大衆文化・流行に関するデータ整理を、研究代表者の婦人雑誌の内容分析の結果や研究分担者の和歌山の高等女学校に関する研究成果、およびその他先行研究文献や年表類を基におこなった。これらは、高齢女性のライフヒストリーを聞き取る際、無意識のうちに影響を受けている文化や風潮、できごとについての記憶を読み起こす触媒としての役割を担えるよう、インタビュー・ガイドの形に整理したが、残念ながらこうしたガイドは期待したほどの効果を得ることはできなかった。

(2) マスメディアの本格的な大衆化時代に婦人雑誌の読者であった女性に対して、ライフヒストリーを伺いつつ、とりわけマスメディア情報の受け手側としての記憶の聞き取りに力を入れた。調査対象は、現在直接の面談が可能な年代で、当時婦人雑誌を講読する経済的余裕と読書習慣をもっていた社会階層の女性(先述のとおり、中等・高等教育学歴、現在 80 歳から 90 歳代)18 名に、各調査対象者それぞれに延べ 2 時間から 9 時間(平均約 3 時間半)のデプス・インタビュー調査を行うことができ、相互作用をとまなうインタビューそのものの中で、研究者自身が実に豊かな示唆を得ることができた。

家庭環境や学校教育経験、児童期・青少年期・成人初期・結婚子育て期・子育て後とそれぞれのライフステージについて、日本社会の状況と対応させながら、各ステージでいかなるマスメディア情報に接し、どのような影響を受けていたかについての質問をていねいに聞き取ったが、個別のメディアや作品の名前を挙げ、直接的な影響について語られることは、実際にはそれほど多くはなかった。しかしながら、ライフヒストリーの中では、折々に、また人生の節々に、流行や消費文化、レジャーが大きな意味をもっていたことが推察

される語りが見られた。あまり意識はされていないが、生活を取り巻く環境としての意味があったことがうかがえた。マスメディアなど大衆文化がもつ潜在的影響力はあまり意識されない。用意した副次的な資料によってあえて具体的な質問をしても、「雑誌はよく読んだけれども、あまり覚えていない」「夢中になったりしたが、どんなものがあったかな?」といった答えも多い。あまり意識化されないからこそ、「自然」かつ無理のない形で、ジェンダー観や女性の生き方に影響を与えるという、マスメディアの機能があらためて浮き彫りになったと解釈している。

(3) ライフヒストリーについては、似通った社会階層であっても、地域や親戚の職業、家庭の教育方針などによる違いがみられたこと、通っていた学校の文化によって受けた刺激が異なること(学校については具体的な記憶が比較的多い)、学校卒業後の進路の違いを生む偶然性と人的ネットワーク、就職したり結婚・出産しながら、ずっと続けている社会活動(同窓会も含めて)や趣味の活動の豊富さなど、丁寧に考察を深めたいポイントが見いだされた。また、この世代の場合比較的若いライフステージで第二次世界大戦を経験しており、人生に与えた影響は多くの場合非常に重要かつ深刻なものとして記憶され語られることについても、メディアとは別の観点から、あるいはファシズム期のメディアという観点から、追加のインタビューが継続できれば、とも考えている。

(4) 読者としての高齢女性へのインタビューと並行して、婦人雑誌を舞台として活躍した流行通俗小説作家の親族(マスメディア情報の送り手側)へのインタビュー調査をおこなった。今回焦点をあてたのは、戦前に女性向け通俗小説作家として著名であった加藤武雄氏であり、彼の家族・親族 3 名に繰り返し、インタビューや資料提供のご協力をいただいた。

「通俗小説」は<女が読む小説>として、文壇において、また文学史において、低い地位に置かれてきた。農民文学者でもあり「通俗小説」の流行作家でもあった加藤武雄は、その作家人生の大半において苦悩していたことが明らかになった。自然主義文学、やがて明確に農民文学を志すようになりながらも、家長として家族を養うため、長男として故郷の実家を助けるため、さらには故郷の農村や農民文学運動を経済的に支えるために、原稿料の高い新聞・雑誌の連載「通俗小説」を次々と書かねばならないという葛藤を抱えていた。「通俗小説」作家であることを恥じつつ、文壇における「通俗小説」蔑視には反発を覚えていた。「私小説」「心境小説」はては「楽屋落ち小説」と言われるような、文壇内輪受けする短編が「芸術」とされ、大衆読者が生活の中で心の糧とするような、物語とモラルを含んだ長編小説が軽蔑されることには、不満をおぼえていたのである。一方で、アジェーションのような紋切り型のプロレタリア文学が称揚されることにも違和感を抱いていた。そうした葛藤の中で、女性読者も含む大衆の関心を引く物語構造をもつ長編小説を描く技能の鍛錬と、農民小説の志を結びつけていく。「通俗小説」と農民文学の間で引き裂かれていた一人の作家が、そのギャップを埋める方向を歴史小説にもとめていく過程を明らかにすることができた。今後は、彼の「通俗小説」の物語構造分析をすすめていく予定である。

以上のように、婦人雑誌情報の受け手側と送り手側の両者の視点から、昭和初期の家庭教育・学校教育・マスメディアのそれぞれがもっていた教育的機能の相互の連関を、個人の「女性」としてのライフヒストリーという時間の流れの中に位置づけるための貴重なデータを得ることができた。

本研究で得たデータの解釈・分析をすすめ、調査協力者の内容確認を経て公表の了承を

得たデータについては(ほとんどのものについてはすでに了承を得ている) まず報告書の形で研究成果として公表する予定である。報告書作成と並行して、各種学会や研究会で報告し、学術的な検討を受ける。発表の場としては、メディア史研究会、日本出版学会、日本女性学会、日本ジェンダー史学会などを予定している。最終的には、研究成果を専門書としての出版を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

木村涼子、<女が読む小説を書くということ-文壇のジェンダー・ポリティクスと忘れられた「通俗小説」作家・加藤武雄、大阪大学大学院人間科学研究科紀要、査読無し、第42巻、2016、pp.343-368

木村涼子、農民文学と<女が読む小説>「通俗小説」のはざままで：加藤武雄の文学論と「義民」小説、大阪大学教育学年報、査読無し、第21号、2016、pp.67-88

土田陽子、地方における高学歴女性のライフコース選択-県立和歌山高等女学校の事例から、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要、査読無し、第37号、2017、pp.1-16

Kimura Ryoko, Organization of Desires in "Novels for Women", Osaka Human Sciences Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Japan, vol.3,2017, pp.39-60

[学会発表](計0件)

[図書](計2件)

(Kimura Ryoko)、出版社：

(Somyong Publishing

Co.)

(Jubue Tansaeng) :

Born of the Housewives :「主婦の誕生」

訳者名：

(Lee Eun-Joo) 李恩珠

2014、375 頁

木村涼子他、大月書店、歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史、274 頁

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 木村涼子 (Kimura Ryoko)
大阪大学大学院・人間科学研究科・教授
研究者番号：7 0 2 2 4 6 9 9

(2)研究分担者 土田陽子 (Tsuchida Yoko)
和歌山大学・システム工学部・特任准教授
研究者番号：3 0 7 5 6 4 4 0

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()